

書評

対話する医療

人間全体を診て癒すために



- 著 孫大輔
- 本体 1600 円＋税
- 発行 さくら舎

評者

首都大学東京 教授
西村ユミ

対話そのものを大切にする 医療のありようとは

病む者の苦悩を どこまで理解できているのか

「病いを抱えて生きるその人の苦悩を、私はどこまで理解できているのだろうか」

あとがきにあるこの言葉を読むと、看護職である私が自らに問いかけているように思ってしまう。あるいは、病いをする人に手を差し伸べようとする全ての専門職、いやすべての人々に通じる問いともいえる。

これを問い続けているのが、医師であり本書の著者でもある孫大輔さんだ。本書は孫さんとともに相通ずる問いを携え、これに応える道筋を歩んでいく、そして時に、一緒に悩み反省し、私もやってみよう！と誘われる、魅力的な書籍である。

「対話」が生み出す 新しい医療のカたち

本書の根っことなっているのは、「原因不明のかゆみ」という孫さんの高校生の頃の経験である。その際、医師は「原因」ばかりを追究し『わたし』という人間全体を診てくれなかった。この経験が、「重装備」ではない「家庭医」へと孫さんを駆り立てた。その際、「病いを抱えて生きる人」という「自分の理解におさまることのない『他者』へと橋をかける試み」としての「対話」に出会う。そして、「人と人がじっくりと膝をつきあわせ、互いに語り合い、聴き合う」対話を吟味し、研究し、活動として発展させ、教育に取り入れていく。

例えば、市民・患者と医療者との対話の場である「みんくるカフェ」。「みんなに来てほしい」という願いがそのままカフェの名称になり、「みんくるファシリテータ育成講座」によって、いまやその活動は全国に広がっている。これが、カ

フェ活動の系譜とその起源とともに紹介される。

谷根千（東京の谷中・根津・千駄木周辺地区）におけるアクションリサーチは、「谷根千まちばの健康プロジェクト（まちけん）」へと発展した。なんと、ソーシャル・キャピタルが健康に寄与していた典型例は「銭湯」。地域のお寺や古民家の関係者ともインタビューを介してつながってきた。

ワクワクしながらこうした研究や活動を読み進めていくと、あるとき「ハッ」とさせられる。孫さんにとって対話は関係性の再構築ではないか、と。対話によって得られる結果・効果よりも、対話そのものを大事にする志向は、医学教育を、あるいは医師の病む者への医療を、与える者と受ける者という関係から、共に行う活動へと組み換える。孫さんにおいては教育も医療も、医学生や暮らしている人々との対話と共に実現する事柄なのであろう。

一緒に密やかな宝物を作り出そう

病いを抱える人の『話を聴いてもらえない』問題、医師としての孫さんの「反省すべき恥ずかしい」経験などを、単に話を聴くことで解消しようとするのではなく、「対話」を通して「自分の中の密やかな宝物」のような経験を作っていくこと、その実現によって地域で暮らす人々が／と「つながって」生きていくこと。本書はそれを、著者の多様な経験、家族の木やユーモアをもった医師の見方、今に続く数々の活動の歴史、その活動を支える理論的・歴史的な知見などをぎゅっと集めて作った「宝物」のような作品である。だから、私は本書を、孫さんのブリコラージュ（Bricolage）と呼びたい。